

## ～日本語弁論大会 下関市長賞受賞者研修旅行記～

この旅行記は、2014年11月8日に韓国・釜山広域市で開催された日本語弁論大会（主催：在釜山日本国総領事館、下関市など後援）で下関市長賞を受賞した学生が、2015年2月11日から16日まで下関市への研修旅行を体験し、その感想をまとめたものです。

研修旅行に関する学生の体験記ならびに本市職員の同行体験記をご紹介します。

### 1. 心を下関に置いて来ました

新羅大学日本語教育学科 関 炳暁（ミン・ビョンヒョ）

私は、去年の11月に行われた在釜山日本国総領事館が主催する「日本語弁論大会」に出場し、幸運にも下関市長賞を頂きました。そのおかげで、下関市の招待を受け、今年2月11日から16日まで、下関へ研修旅行に行き参りました。そして、あの温かい思い出を心に浮かべながらこの文を書いています。再び思い浮かべるだけで嬉しくなってくるあの思い出、下関での話を、皆さんにお伝えいたします。

2月11日の夜に韓国の釜山港で関釜フェリー（星希号）に乗って、翌日の朝下関に着きました。そして、ホテルでの1泊をはさんで、いろいろなところ（神社、市場、展望台等）を巡りました。それから、市役所で市長を表敬訪問した後、2泊3日のホームステイをしました。これらを全部説明しようとする、一日あっても足りないですので、最も印象深かったことを3つご紹介し、最後にホームステイについて説明させていただきます。

最初にご紹介したいのは、「梅光学院大学の学生たちとの交流会」です。下関に着いた日の午後4時ごろから、梅光学院大学で学生たちと交流会をしました。まず、梅光の学生たちが私たちにキャンパスを案内してくれました。そして、校舎内のカフェに戻って、一緒に簡単なゲームをして、お互いの学生生活などについて自由に話し合いました。私はこの時、この方たちが私たちのために大変多くの準備をしてくれたことに気付きました。

韓国では俗に、日本の国民性を「個人主義」と表現することがあります。他人に迷惑もかけず、不要な干渉もしないということです。別に悪い意味ではありませんが、このせいで私は、日本人と深い関係になるには、相当な時間がかかるだろうと思っていました。しかし、梅光の学生たちと会ってから、考えが変わりました。もちろん本当の意味で親密になるにはとても足りない時間でしたが、梅光の学生たちは私たちに、昔から知っていた友のように親しく接してくれました。これは私にとって、かなり感動的な体験でした。日本の「温かさ」を感じたのです。短い時間でしたが、私はあの学生たちと別れるのがとても寂しかったです。私たちが乗った車

が去るときに、最後まで見送ってくれたこともとても印象的でした。縁があったらまた会えますように。本当にいい出会いでした。



一緒にカルタをしました



最後にみんなと記念撮影をしました

2番目にご紹介したいのは、「長府庭園での着付け体験」です。私たちは2日目の朝、長府庭園に行って伝統衣装を着るという体験をしました。伝統衣装についての簡単な説明を聴き、それを着て庭園の中を歩き回りながら記念写真を撮りました。私はこちらに来る前には、普通の着物を着てみるだけだと予想していましたが、思いもしなかった鎧があって、それを着る経験をしました。

鎧を身に着ける前に、まずは着物を着ます。韓服(ハンボク)は、韓国で何度か着たことがあります。日本の着物は初めてでした。着物には着物の魅力があって、とても綺麗でした。色彩もとても良かったし、とくに肩から足にかけてすっと伸びるラインが素敵でした。女性用の着物は、足の部分が狭くて歩きにくくなっていました(歩き方が綺麗に見えるように、そうなっているそうです)が、それがけっこう珍しかったです。着た人も、着物は初めてだったので、不便に感じたようでした。

私が着た鎧は、着るだけでけっこう時間がかかり、重さもすごく、歩くことさえ大変なほどでした。こんな鎧を着て戦うなんて、昔の武士はすごい人たちだったのだなと思いました。でもいざ着てみると、すぐに気持ちが高まってきて、腰に差した刀を抜いたりしながら、将軍みたいにあちこち歩き回りながら写真を撮りました。韓国に戻ってからも、まず自慢したのがこの経験です。ここで撮った写真を友人たちに見せながら、なかなか経験することができない珍しい体験を自慢しました。



今、もう一度見ても、やっぱりカッコいいですね

3番目にご紹介したいのは、「海響館」です。前に大阪へ行った時には、「海遊館」に行きましたが、あれに匹敵する水族館が下関にあるということに驚きました。むしろ、海遊館では見られなかった珍しい種類の魚を見ることもできました。もちろん韓国にも水族館はありますが、実は私は韓国では水族館に行ったことがなく、日本での経験しかありませんので、さらに興味深く感じました。イルカとアシカのショーも観ました。日本語の命令の語感がよかったし、動物たちと調教師との呼吸がとても素晴らしかったです。あの珍しい妙技を見ていると、大学生である私も子供のように驚くしかありませんでした。それから、海響館には、ペンギンがたくさんいました。水族館なのに、魚ではないペンギンが非常に多いので不思議だと思いましたが、市役所に行ってみるとペンギンが下関市の鳥だと分かりました。何だか、下関とペンギン、けっこう似合いますね。



イルカショーの様子

珍しい魚、マンボウ(左)とピラルク(右)

最後に、ホームステイのことをお話します。実は、下関での経験の中で私が一番よかったと思っているのは、まさしく「ホームステイの経験」です。2日目に市役所で表敬訪問をしてから、2泊3日のホームステイをしました。ホームステイ先の方たちは私を家族のように、気さくに親切にしてくださいました。お母様が作って下さったご飯もおいしかったですし、夕食の後お茶を飲みながら話し合ったこともとても楽しく、夜遅くまで寝ないでずっとお話しました。また、下関駅の隣の映画館で映画も観て、小倉の繁華街にも行って、教会にも行って、門司港レトロにも行かせて頂きました。いろいろなおいしい食べ物もたくさん食べさせて頂きました。これだけでもとてもうれしかったのですが、更にお父様からたくさんの日本の食べ物(インスタントラーメン、お菓子、ふぐのギフトセットなど)が入っているカバンを贈り物として頂きました。本当に大きな好意を頂き、私が何をしても報い切れないほどです。是非またご挨拶に伺いたいです。



ホームステイ先で



ホームステイ先の皆様が帰国を見送って下さいました

俗に、韓国は「情」の国だと言われていますが、私は下関でもとても暖かい「情」を頂きました。下関には、韓国では見られなかった、「下関ならではの情」がありました。私は下関のあちこち、そしてホームステイ先で、この「下関ならではの情」を頂きました。下関には、おいしい食べ物、素敵な神社、綺麗な風景、面白い観光地があります。そして、直接行ってみないと全く分からない「下関ならではの情」がありました。これが下関の一番の魅力だと、私は思います。そこで私は、心を下関に置いて来ました。今、再び釜山で生活が始まりましたが、心の一部はまだ下関にあります。最後までお読み下さり、ありがとうございました。

## 2. 日本語弁論大会下関研修旅行を終えて

下関市総合政策部国際課

釜山広域市派遣職員 大江 敏彦

この下関旅行は、去る平成26年11月8日に釜山広域市で、外務省の在外公館である在釜山日本国総領事館(共催：社団法人釜山韓日文化交流協会)が主催する第31回日本語弁論大会において下関市長賞を受賞した大学生を、実際に下関に招待し、観光地視察、文化体験、学生交流、ホームステイを通じて、肌で下関、そして日本を知っていただくとするものです。

とくに今回は、中国の青島市でも行われた日本語弁論大会の下関市長賞受賞者2名と、青島市に派遣されている職員との5名で、下関市内を巡りました。当然、会話は全員の共通語である日本語で、しかも久しぶりに帰国して再開した私より若い同僚と、そして礼儀正しく優秀な若者達と懐かしい地元を巡るといふ、気持ちの楽でしかも楽しいという二通りの楽という漢字を使って表現できるありがたい機会をいただきました。

下関、そして日本を知っていただくということで、普通の観光旅行では経験できないプログラムとしました。さすが日本語弁論大会の入賞者だけあって、コミュニケーションは全く問題ありませんでした。理解力もすばらしく、源平の合戦や明治維新などの下関市を舞台にした史実、また耳なし芳一の怪談など、海外の学生にとっては難しい話もしましたが、しっかりと聴いてくれました。他にも、みのりの丘で豆腐作りを体験したり、蛍街道西ノ市で温泉体験をしたりしました。下関市内には他にも、角島大橋や川棚温泉、季節によってはイチゴ狩りや梨狩りなどの体験、土井が浜遺跡や綾羅木郷遺跡などの歴史的な観光資源もたくさんありますので、来年はこのような場所を行程に組み入れることも検討したいと思います。

そしてなんとといっても、ホームステイです。彼の中でも大変印象的で心に残った経験でした。知らないご家庭に泊めていただきお世話になるというのはお互いになかなか緊張するものですが、本当に楽しくリラックスした時間を過ごせたようです。こうしたことが自然にさりげなくできるのは、ご家庭が円満な証拠ですし、なかなかできないことだと思います。おいしい家庭料理を一緒に食べ、エキゾチックな門司港エリアを散歩し、映画を観て繁華街をぶらぶらしておいしいものを食べたりと、幸せな日本の家族としての週末のひとときを送ったことと思います。彼も童心に帰って楽しんだのでしょう。下関港国際ターミナルのゲートをくぐり、関釜フェリーに乗ったときには、なんだか夏休みの帰省が終わって帰るときの、夢のような時間が終わった時の子供のようにでした。

心は時空を超えます。体は釜山に戻りましたが、別れ難く名残惜しい気持ちが下関に残っていることを「心を置いてきた」と文学的に表現しているのだと思います。彼が置いてきた心が下関で出会った方々の心の中で大きく膨らんで、そして同時に釜山で、これから出会うたくさんの方々の心に伝わり、友情の輪が広がると本当に素晴らしいことですし期待もしています。

末筆になりましたが、お忙しいところこの日本語弁論大会下関市長賞受賞者下関招致事業にご協力いただきました、関係各位のご厚意に感謝いたします。